

## 荒川洋治「冬の紅葉」論

吉田 敬

### はじめに

「冬の紅葉」は荒川洋治の詩集『空中の紅葉』（一九九九年一〇月 思潮社）におさめられた一六編の詩のうち四番目のものである。初出は「現代詩手帖」（一九九八年一月 思潮社）で、連作詩「物流」（一九九七年七月―一九九八年六月）一編の六番目に置かれていた。

一九七三年第四次中東戦争による第一次オイルショック、一九七八年イラン革命による第二次オイルショックがあり、一九九〇年イラク軍がクウェートに侵攻して再び石油事情は悪化し、さらにバブル景気は崩壊してこの詩の発表当時の出版界はかなり危機的状況にあった。荒川洋治は現代詩作家であるとともに、若い頃から、詩集専門の小さな出版社である「紫陽社」の経営、編集にあたっており、こうした出版界への危機意識から物流をモチーフにした連作詩を発表したと考えられる。連作詩「物流」は、詩をめぐる環境、詩の質、思想性、編集などについて語っており、このうち「冬の紅葉」は、文化と流通を主題にしている。

「冬の紅葉」は連<sup>バ</sup>ごと<sup>イ</sup>に一行空白を置いた一〇連で構成されてい

る。前半部の六連は句読点をとまなかった散文で、七連二行目の句点の一箇所を除いて、後半部の四連は句読点を施さない行分け文になっている。また、一、五、七、八、一〇連は、二、三、四、六、九連から三字下げられ段差をつけて書かれており、上部の段は物語を進めるもので、下部の段はその補説を行い、いくらか主観的で、主人公の「ぼく」の思いを述べるものとなっている。また、四連、六連の文体は臨場感のある会話体となっている。そして、詩集『ヒロイン』（一九八六年三月 花神社）で試み始めた傍線（荒川洋治は「ポーセンカ」と呼んでいる。「ポーセンカは夏の花」一九八五年一〇月「現代詩手帖」）を六連四行目に施して注意を促したり、「いまは亡き」大手書籍□□会社（二連一行目）や、「どの藩の方が。むずかしいことをいう」（四連一行目）のようなイロニーを含んだ諧謔を織り込んで表現のふくらみをもたせている。また、一部伏字が施されているが、個人名、会社名はともかく、「当時すでに、大手／書籍□□会社は日本の□□を□□するほどに□□化し、ひとつの□□ともなっ／ていたから」、「三連六行目」のように物語関連で必要とされる部分は、大手／書籍「取次」、日本の「出版」、「支配」、「巨大」、ひとつの「独占」あたりでは

ないかとほぼ推測できるもので、読者の好奇心を刺激する工夫にもなっている。

第一連は主文の物語から少し距離を置き、表記も三字下げにして、主人公の「ぼく」は「夢のようなできごと」に遭遇した」として、事実と虚偽について語り、「どちらでもない、どちらにもなれない、なるうとしない今日の自他の詩の「良風」に對峙する」(一連四行目)と「ぼく」はいい、今日の詩の状況と、詩に對する詩人たちの姿勢について述べている。続く連は詩集の商品としての物流について語り、後半の行分け文は前半で扱った意味と關係をもちながら詩の繁榮を希う抒情的な場面へ続けている。

冬の葉を落としたもみじの樹は、幹や太い枝から小枝を突き出してゐるばかりで必ずしも風情のあるものではない。本来もみじは紅葉の意味をもち、あえて「冬の紅葉」としているのはこの物語の比喩表現と考えられる。

「冬の紅葉」について論じられているものはいまのところ見当たらない。この小論では主人公である「ぼく」の物語を軸に、作品の構成に注目しながら、布置された隱喩的表現の語句の意味をつなぐことによつて解説し、作品の意図をさぐる一考察に充てたいと考える。

## 一 虚構と事実

「冬の紅葉」の冒頭は次のようなことばで始まる。

一九七三年二月五日、ぼくは夢のようなできごと<sup>①</sup>に遭遇した。一部を仮の名にして書く。事実でも夢のできごと<sup>②</sup>ならそうするほかない。「でくるんだ部分は虚偽、あるいは事実。空白すらも虚偽であり、夢となれば事実である。どちらでもない、どちらにもなれない、なるうとしない今日の自他の詩の「良風」に對峙する。

(一連一行目)

この連の語りは「ぼく」が遭遇したという「夢のようなできごと」について二つの事柄を述べている。

第一は「ぼく」は「夢のようなできごと」に遭遇したのであるが、「夢のようなできごと」であるために一部を仮の名にして書くということである。「夢のような」を「夢のできごと」に置きかえることによつて事実でも仮の名にして書くことを必然としている。「夢のようなできごと」とは、思いもかけなかったできごとである。「夢のできごと」であれば夢を見たのは事実であり、夢そのものは虚偽である。虚偽である限り人名や会社名などの固有名詞や、それらにまつわる文言の一部を仮の名にして書くというのである。

第二は「ぼく」や他の詩人たちの今日の詩が安住している態度に對峙するということである。「夢のような」ために、事実でも仮の名で書くのであり、遭遇したできごとは虚偽なのである。思いもかけないできごとから「夢のできごと」に、さらに虚偽へと意味は生成され、「今日の自他の詩」に結びつけて、今日の詩が事<sup>インシクシオン</sup> 実にも、虚偽すなわち「虚構」にもなれないことの批判の言説に導いている。

荒川洋治は詩のフィクション性について次のように述べている。

では詩のことばは果たしていま、「フィクション」として認識されているのであろうか。それを今日の詩の作者たちに、そして自分にも問いたい。こんなことを書けば、こんなふうにとられてしまおうと恐れるのか、詩人たちは「フィクション」として詩のことばをつかうこと、動かすことを極端に避けるようになった。繰り返すことばは詩のなかに置かれている以上、基本的には「フィクション」であるはずなのだ。そしてそこにこそ「詩の自由」があり、またその「自由」を主張することができるはずのだが、作者たちは自分の詩のことばが「フィクション」であることを忘れてしまった。あるいは故意に忘れようとしている。そのため散文として読まれて事故が発生するような、危険性のあるものは書かなくなった。

『忘れられる過去』二〇〇三年七月みすず書房

長い間、詩の作品は詩人自身の生活と思想そのものの反映であるとされてきた。そこで、「冬の紅葉」の語り手は、「今日の自他の詩の「良風」に対峙する」と、詩のフィクション性を主張する姿勢を明示している。また、事実を述べるとする散文に「一部を仮の名にして書く」として架空性を置き、さらに仮構されたヨシフ・プロッキーとの対談の場面を展開し、ゆるやかに行分け詩に導いている。前半のように散文形式であろうと勿論詩であり、一部を仮の名にして書いたり空白を

置いたりして事実でも虚構<sup>フィクション</sup>として物語を展開させているのである。

## 二 意味の齟齬と交錯

### (一) 詩集は商品か文化か

主人公である「ぼく」は、小さな出版社を営んでおり、出版したF氏の詩集二〇部がなぜか取引のない大手書籍□□会社（おそらく「取次」の語が入る）A社の倉庫に返品として紛れ込んでいた。A社の課長は、手数料を支払って引き取ってくれという。この事件<sup>トランプ</sup>をめぐって、「ぼく」は返品とは大手書籍□□会社の流通を通ったことであり、伝票はなく返品には応じられないと主張し課長と一時間ばかり交渉する。

「ぼく」が発行したF氏の詩集の二〇部がなぜ大手書籍□□会社の倉庫にあるのかについて、「とすると、製本所で他の本とまぎれてしまい、そのまま流通に乗せられたとしか思えない」（四連八行目）と、「ぼく」によって推測されている。また、「返品」という考え方に納得できない理由として、「ぼく」は、「人間の意思とは無関係にことが起きた場合でも、人間の意思をあく／まで尊重すべきだ。それも、その品物に愛情をより強く感じている人のほうの／意見に寄り添うべきだ」（四連一〇行目）と主張し、詩集の二〇部に対する思い入れの軽重を論拠にしている。また、「もし（返品）」という事態／を容認するならば、繰り返すが、この詩集はあなたの会社の流通を通った証拠

／である。ということ、あなたとこちらはいま（深い結びつき）にある。言葉／を超えようとしている。それが文化でしょう」（四連一二行目）と、かなり飛躍した考え方を示す。

これに対して課長は、「本は文化ではない。物である。」（四連一六行目）と応戦する。しかし、「ぼく」は、「たしかに本は、文化ではない。物である。だが、物を、物を取りあつ／かう以上に物として遇しなくては、と思う人もいていい」（四連一七行目）と頑なに抗弁する。課長は、続ける言葉を失って、「どの藩の方か。むずかしいことをいう」（四連一九行目）と、笑うことでその場をおさめる。

小さな出版社の詩集本の出版環境をめぐる課題のひとつは、流通、配本であるが、荒川洋治は「現代詩手帖」の討議で、出版界の環境の重大な変化の局面に対して詩人たちが無関心であることを批判している。

今般ご存じのように本の背番号制<sup>3</sup>というのが進行しつつありま  
すね。ものを書いた場合、それが読者の手に渡るまでいろんな政  
治的な動きが関わっていくわけです。好きな本が読めないし、自  
分の書いた本が読者の手に届かないという状況になってくる。こ  
れは現代詩だけじゃなくて、文化全般に関わってくる重大な問題  
だと思っんです。これが現代詩をとりまく一つの環境だとすれば、  
そうした外界の事況<sup>3</sup>にたいして現代の詩人たちは余りにも無知だ  
ということがある。

と語り、さらに続けて、

さっきの背番号制といったように、配本関係に問題がある。

かなり前から、日本で配本制ということが独占的に行われていま  
すよね。東版、日版、栗田書店ぐらいで占められている。少数  
の本は扱わないとか、配本システムをコンピュータ化して、売  
れない本は切り捨てるということになる。

（討議「現代詩はマンガより面白いか」「現代詩手帖」一九八〇  
年八月号）

雑誌・書籍の流通は委託配本制度のため流通会社を通さないと書店  
の店頭で置くことができない仕組みになっており、少数の書籍の書  
店販売は極めて困難な状況にあった。現在大小あわせて五〇〇社近  
くの出版社があるが、全国の書店流通網をもつ大手取次（トーハンや  
日販）は、出版点数が少なく、売れ筋とは縁のない零細出版社の出版  
物を扱うことはない。零細出版社は取次との取引口座を開くことがで  
きず、書店に本を並べるとは難しい。（現在紫陽社は地方小出版・  
流通センターに加入している）

第二連、第三連で語られる話題は本の流通についてである。物語は  
大手書籍□□会社の倉庫に紛れ込んだ二〇部の詩集に対する「ぼく」  
と課長の認識の違いによる争論である。課長は二〇部の詩集を返品さ  
れた商品として扱い、「ぼく」からその手数料を受け取ることで決着  
すると考えている。一方、「ぼく」は二〇部への思い入れが強く、出

版した本が流通することを願っている。課長の考えと「ぼく」の考えには大きな齟齬があり、奇妙な会話を生んでいる。「ぼく」がいう「伝票がないので応じられない」というものは、事務的な手続きのレベルで課長にも理解できる。しかし、詩集二〇部への愛着から詩集が組織を越えて読者に届くことが文化であるとする考えは課長には理解できない。本は商品であり、同時に文化的なものでもある。流通にたずさわる者にとって、本が文化的なものであるという認識が希薄であることに問題があり、荒川洋治が対談で述べている配本制の課題にもつながるのである。

## (二) 囚われの詩集

第六連は唐突に「ぼく」と、ヨシフ・ブロッキー、ブロッキーの妻、ブロッキーの読者との会話で構成されている。本が単に物としてではなく、文化として流通される意味に導くために召喚された人物たちである。ヨシフ・ブロッキーはロシア生まれのノーベル賞を受賞した亡命詩人である。一九六三年彼は徒食者として逮捕され、裁判では後々まで伝説的に語り継がれるほどの見事な受け答えをしたが、五年間の強制労働の判決を受けた。この裁判を傍聴した女性の裁判記録が公表され、無名の詩人は世界中の知るところとなり、内外の文学者の抗議のため結局一年半で自由の身となった。

物語はヨシフ・ブロッキーが逮捕されたことと、二〇部の詩集が荒縄でくくられ、囚われの状態にあることを重ねて進行する。

ヨシフ・ブロッキー「若いかな、君は。そんなことで、法廷でもないところで、青くなるなんて」

二四歳「ええ。でも二〇部のなかの二〇部というのは、とても大きな数で、ぼくは、話している間じゅう、これはどうなるのかしらないが、その、荒縄にくくられた二〇部の詩集を、ずっと、見ていましたよ」

ブロッキーの妻「ほしかったのね」

ブロッキーの読者「見ていたから負けたのだ。そういうときは、相手の目をじっと見つめる。そうしておくしかない」

二四歳「二〇部の詩集は、二〇〇部の詩集全体より輝いていた」  
ブロッキーの妻「ええ。そんなふうに、思うところからです。壊れていくんですわ。今晚も崩れますよ。それって、すごく計画的なことです」

二四歳「あれっ。計画は、あつちのほうでしょ」

ブロッキーの読者「もみじを知らんなあ。計画というものは、あつちにあつたものが、やがてこつちの山にも移ってくるのだ。時は柱のようにまっすぐだ」

ブロッキーの妻「あのう、みなさん。お湯いかがですか。それとも熱いお湯？」

(五連一行目)

「ぼく」は二〇部の詩集をかけがえなく思いながら文化の発展を願う気持ちでブロッキーたちと会話する。異なった経験をもつブロッキ

「たちとの会話は齟齬を生みながらも、ことばの意味は交差してつながり新たな展開を示す。

ことばがズレながらつながっているところとして、例えば、「法廷でもないところ」で、青くなるなんて」（六連一行目）に対して、「その、荒縄にくぐられた二〇部の詩集を見ましたよ」（六連四行目）と、囚われという観念のもとにつながって答えている。また、「それって、すごく計画的なことです」（六連二一行目）というプロツキの妻のことはに対して、「あれっ。計画はあつちのほうでしょ」（六連二二行目）と応じている。二人の会話は大きなズレを起こしているが、危機的状況を打開する計画の意味として微妙につながっている。

また、「壊れる」から「計画」への意味の流れを考察していくと次のようなものである。プロツキの妻は「ええ。そんなふうに、思うところからです。壊れていくんで／すわ。今晚も崩れますよ。それって、すごく計画的なことです」（六連一〇行目）と、空模様のくずれに重ねながら、詩をめぐる状況とも出版界の状況を示唆するものともとれる発言をする。彼女は亡命がそうであったように、願いをもつことからのすべては始まるのである。さらに、「今晚も崩れますよ。」（六連二一行目）は、「青い小袋のなかで」（八連五行目）の表現を受けて、擬態語をともなった、「もそもそと／空からも崩れる雨の日に」（九連一行目）と対応している。プロツキの妻の言う（自由を得るための）計画は、（ぼく）の考えていた（会社側が考えていると思っていた）計画と重なり、「ね。いっしょに計画しようよ。」（八連六行目）と、

さらに「時は柱のようにまっすぐだ」（六連一四行目）という季節の変遷に喩えられ、もみじの紅葉の移動を暗示し、プロツキの亡命の移動ともつながっている。

また、プロツキの妻の「あのう、みなさん。お湯いかがですか。それとも熱いお湯？」（六連一五行目）の「お湯」ということばの流れを追うと次のようなものである。不思議な賄いとしての「お湯、あるいは熱いお湯」ではあるが、お茶をいれるためのものである。「お湯」は「物流」／この二つの文字は熱い湯のなかに通されたのだ」（七連二行目）と詩集二〇部が試練を通った意味にも、「そのうちの二〇部を袋に入れて／お茶を溶くように眺めてきた」（七連七行目）や、五連、八連、一〇連の「ラーメン」を通すお湯にもつながっている。

このように物語のなかで意味が布置されたことばは響き合い、詩的雰囲気醸し出しているのである。

### 三 詩への愛着と出版へのこだわり

荒川洋治は一九六五年五月高校に入学すると、あまり知られていない郷土の詩人則武三雄（のりたけかずお）（本名一雄）（一九〇九〜一九九〇）を訪ねて師事した。

ぼくは高校時代に地元のほとんど無名の詩人  
林房雄の文芸時評にいきなり単独でとりあげられ  
その人の大きな写真がのった日をおぼえている

こんなに大きな写真がのるようになるのなら  
詩歌の道に入るのは少しも人として恥すべきことではない

こわくはない  
とぼくは思った

（荒川洋治「ロングセラー」『空中の茱萸』一九九九年一〇月）

これは、「ロングセラー」で則武三雄について語られている個所である。林房雄は、朝日新聞一九六四年九月「文藝時評」（林房雄『文藝時評』一九六五年四月桃源社に収録）欄で、「紙と本への愛」と題して則武三雄を取りあげた。林房雄は、「則武三雄氏の「紙の本」（福井市、北荘文庫版）は日本の紙をうたった珍しい詩集である。」と紹介し、「漉く」という詩を引用して、「紙への愛は詩への愛であり、それと、名人「紙すき平三郎」にささげる愛情の三つが一枚の白紙のようにつきあげられてこの詩集をつくりあげた」と述べている。また、則武の師事する三好達治の死にあつての歌、「耀かぬ星」について、「生きた星として自ら光を発している。三好が生きていたら、同じ言葉を使ったにちがいない。」とも述べている。則武三雄は北荘文庫という小さな出版の仕事もしていた。彼の出版活動は自ら製本を行う営みであったため紙へのこだわりを持っていたのである。

三好達治、則武三雄、荒川洋治という師弟関係がある。そして、荒川洋治はいまでも原稿を書くかわら「紫陽社」という小さな出版社で、新人の第一詩集を中心に二六〇点（二〇〇一年六月現在）を刊行している。則武三雄が荒川洋治に伝えたものは、出版活動に象徴され

るように、詩に対する限らない情熱の姿勢であつたと考えられる。

言葉より多くの詩を書いた友人に

「ね、いっしょに眺めようよ」

と 冷たい物の世界へ誘つたこともある

二〇部の寝息を詰めた

青い小袋のなかで

「ね。いっしょに計画しようよ。人が物をぶつけ、みずからも石になるまでは、いろんな道があるんだ。たとえばね、あそこに、きれいな、燃えるようなラーメン屋が、あるだろう。その近くには大きな建物がある」  
（八連一行目）

これまでにない新しい詩があると感じられるものであつても、無名の詩人であれば本を作り大手取次会社から配本できるものではない。「ぼく」は、ひっそりと寝息を詰めている二〇部の詩集の「青い小袋のなか」に入つて詩の計画を語るのである。

一九七九年七月、井坂洋子の処女詩集『朝礼』を出した。これは『80年代詩叢書』（全四巻・紫陽社の第一回配本である。その年の春ぼくはある雑誌の投稿欄で、井坂洋子という人の詩を読み衝撃をおぼえた。これまでにない新しい「詩」があると感じた。編集部から井坂さんの住所と電話番号を聞いた。ぼくは、突然電話を入れ、あなたの詩集を出したい、また、それを第一巻として

若い詩人たちのシリーズを出したい、それですぐにでもお会いしたいと彼女に伝えた。ぼくは異様なほどこの出版を急いだ。企画を他の人がぬすむのではないかと思つたのだ(まさかとは思うが、心配で前夜は眠れなかった)。二カ月で詩集ができた。井坂さんとぼくは、神田の製本所・美成社の前の路上で、詩集の見本のできあがるのを待った。そのうちに疲れて、ぼくはそこらへんにしやがんだ。

〔詩の時間〕『忘れられる過去』二〇〇三年七月みすず書房

これは荒川洋治が、これまでにない新しい詩を書く詩人を見つけて出版をすすめ、製本所の前の路上で詩集の見本の出来上がりを待つ光景であるが、八連の「言葉より多くの詩を書いた友人に／「ね、いっしょに眺めようよ」／と 冷たい物の世界へ誘つたこともある／二〇部の寝息を詰めた／青い小袋のなかで(八連一行目)」という「ぼく」の姿と重なるものがある。それは、「今日の自他の詩の「良風」(一連五行目)に安んじることなく、むしろ時代に挑戦し、議論を巻き起こし、詩の文化を発展させるためには「計画」が必要であり、「いろんな道」があると、この詩が主張するものでもある。

また、「人が物をぶつけ、みずからも石になる／までは、いろんな道があるんだ」(八連六行目)という表現は、現代詩に対する「ぼく」の姿勢の一端を語つたものである。「物をぶつける」いう批判としての比喩は、「美代子石を投げなさい」という詩にその原型を見ることが出来る。

かの詩人には

この世の夜空はるかに遠く

満天の星ががやく水菓のように美しく

だがそこにいま

あるはずの

石がない

「美代子、あれは詩人だ。

石を投げなさい。」

(「美代子石を投げなさい」詩集『炭坑夫トツチェルは電気をつけた』一九九四年一〇月彼方社)

荒川洋治は宮沢賢治を「彼は世界観はつくれたが敵対する世界を知らないまま終わった。かわいそうな人だ。これは詩人として決定的なことである。」(『夜のある町で』一九九八年七月精興社)といい、また、「たしかに賢治は、それに値する現代性を、そこそこにもちえてはいるが、一極集中が、戦後のまた今日の、詩の現実を、人々の関心の外へ追いやっていくことの意味を、個々の意見ではなく、大きな枠組みのなかで判断すべき時期に来たように思う。」(『世間入門』一九九二年三月五柳書院)と批判している。

一方、城戸朱理は、荒川洋治について、「現在、荒川洋治ほど騒然たる賞賛と批判にとり囲まれつつづけている詩人はいない。その是非はおいて、そのことは少なくとも彼が時代の問題の焦点に身を置きつつづけていることを意味している。」(「解説」『現代名詩選Ⅱ 現代詩文庫

・特集版2』谷川俊太郎他二〇〇一年九月思潮社」と語っている。

これらのことから荒川洋治が考える現代詩は、美学的に世界を語るのではなく、時代の現実を通して批判し、批判される実学的世界を考えていることがうかがえる。「人が物をぶつけ、みずからも石になる／までは、いろんな道があるんだ。」（八連六行目）という文言は、主人公の「ぼく」が言葉より多くの詩を書いた友人（八連一行目）に、美学ではなく実学の詩を書き批判され、批判できるだけの詩人になるためにはさまざまな道があると語っているのである。「ぼく」は文化というものが、「大きな建物」（二〇連一行目）のそばの「きれいな燃／えるようなラーメン屋」（八連七行目）の灯火のように、ちようどもみじの樹が山を越えて次第に紅葉していくように広がっていくことを夢見るのである。

もぞもぞと

空からも崩れる雨の日に

誰が一人で

傘をさすだろう

あなたのくるぶしよりも詩のくるぶしよりも二〇部が好きだった

ぼくが幽霊となつたいまも　そしてまた幽霊ではなかったあの日

も  
（九連一行目）

ブロッキの妻が言った通り空は崩れて雨模様であり、詩的環境は崩れかけている。一人で傘をさして凌ぐというものでもない。現代詩

の変容が問われているいま、「あなた」の肉体としてのくるぶしが暗示する性的なものや、詩の脚韻以上に、新しい趣のあるあの詩集二〇部が好きであった。世間に流通する可能性をもちながらも「荒縄でくくられ」、行き場を失った詩集二〇冊にたいする「ぼく」の思い入れの心は深い。「ぼく」はそれ以後、「本ができるといつも／そのうちの二〇部を袋に入れて／お茶を溶くように眺めてきた」（七連六行目）のである。二〇部を袋に入れて眺めながらお茶を飲むのであるが、お茶が湯に滲み出して染めていくように、袋のなかの詩集が世間に流通していくことを夢想する。

荒川洋治は発刊した詩集の委託販売をとりつけるための行脚を次のように記している。

小さな書店を一軒ずつ廻って委託をとりつけた。都内だけでは

なく大阪や京都にも足を運んだ。北は札幌から南は小倉まで三〇

店近くに委託できた。地方へは郵送した。都内は自分で運んだ。

／ぼくはその頃サラリーマン。毎朝家を出るとき、新刊の詩集を

三〇冊、四〇冊と手提げの紙袋に詰めた。両手に紙袋というのも

普通のことだった。重かった。

（『本を運ぶ』『言葉のラジオ』一九九六年四月竹村出版）

「ぼく」は詩集とともにあり、二〇部に成り代わって青い小袋の中で友人に計画することをささやいたり、根拠を失った二〇部の幽霊になつたりして語る。

ところで、「これはどうなるのかしらないが、」というくだりの傍線は読者に注意を促すものであるが、「ぼく」の意識から幾分距離を置いた表現である。二〇部の行方はどうなったろう。「ぼく」が幽霊になつたままも（八連六行目）と、二〇部に憑依して二〇部の「ぼく」がいま存在を失つたような表現や、「二人の指は 一札して割り箸を裂く」（二〇連六行目）などから二人の意見は決裂して詩集は囚われたまま、あるいはその後裁断される運命との見方ができる。しかし、「夢のようなできごと」の夢を樂觀的にも解釈できる。課長の「どこの藩の方か。むずかしいことをいう」（笑い）という文言を好意的にとることもできる。その場合は、「ぼくはそのあと 課長とラーメンを食べた／冬の日も どこからか色は降つて来た。」と、課長との争論のあと近くのラーメン屋で一緒にラーメンを食べるのであり、課長の配慮によつて和解したあとの場面ともとれる。

しかし、自由経済における企業の論理の流れはただ、課長の人柄や人情に委ねられてすまされるものではなく、樂觀的な結末はあり得ないと考えられる。

「これはどうなるのかしらないが、」という詩集の二〇部は「ぼく」の物語から離れて、読者の想像力に委ねられることになる。ほのめかして成り立つ物語は読者に意味の再構築を求めている。語り手がその結末を明示しないことによつて読者に印象づけ、余韻を残しながら、詩にまつわるさまざまな課題を夢ある方向で考えられることを願っている。「ぼく」は詩集の二〇部とともに青い小袋のなかで寝息を詰めており、「ことばより多くの詩を書いた友人」の作品がもみじの紅葉

するように山々に広がっていくのを幻視するのである。

### まとめ

詩集『空中の茱萸』と連作詩「物流」の中の「冬の紅葉」は編集のためか多少の行わたりの違いはあるものの内容の違いは見られない。詩集『空中の茱萸』が編纂された時、「物流」一一編のうち最初の香港の出版事情を語つた「竹」が除外され、新しく「石頭」、「文庫」、「欲望の感激」、「嵐のあとの風の歌」、「ロングセラー」、「秘密の構成」の六篇が編入されている。詩集『空中の茱萸』やその後出版された『荒川洋治全詩集』には「物流」という標題は見られない。「物流」という出版の危機的観念をモチーフにして書かれた連作詩であるうが、詩集『空中の茱萸』に改編されることによつて、「物流」からより広い概念の〈文化〉的内容に重心が移動したと考えられる。

一編の詩は、「これまでにない新しい詩」であつても、ただ詩の雑誌に掲載されるもので、必ずしも多くの人の目に触れることはない。詩集になることでより多くの人に読まれることになる。優れた詩は限られた人たちがばかりでなく、さらに多くの人々によつて読まれる必要がある。それが「ぼく」のいう「文化」にも通じるものである。

荒川洋治は詩人であるとともに、出版人でもあり、井坂洋子の詩を見出して処女詩集『朝礼』を発行した。また、伊藤比呂美の詩集『姫』を発行するなどして、女性詩ブームをひき起こした。「思潮社は、その三年後、一九八二年に『叢書・女性詩の現在』をはじめ、伊藤比呂

美、井坂洋子らの新詩集を出した。そのあともしばらく思潮社は紫陽社の新人たちの詩集を出す時期があった」（荒川洋治「詩集の時間」『忘れられる過去』二〇〇三年七月みすず書房）とある。井坂洋子も伊藤比呂美もいま活躍している詩人である。小さな出版社で作られた詩集は有名出版社で発行され、大手取次会社を経て書店に並ぶ。もみじの紅葉は山を越えて移動したのである。「冬の紅葉」は詩の環境と詩のありようを提言する作品である。

注（1）ここでは『荒川洋治全詩集』（二〇〇一年六月 思潮社）をテキストとした。

（2）一九七一年荒川洋治は大学の先輩である時枝清高氏と檸檬屋という出版社名で自らの第一詩集『娼婦論』他数冊を刊行するが、一九七四年紫陽社という出版社名に改めた。

（3）ISBN（国際標準図書番号）のことで商品管理（電算化）を目的として作られた番号である。一九六五年イギリスの出版社が商品管理のために本にコードを付け始め、一九七一年に国際化された。日本では一九八一年から附番が開始された。住民基本台帳（住基ネットワークシステム）は二〇〇二年八月稼働した。九〇年代、書籍の再販制、委託販売制度の問題が話題になった。また、住民基本台帳は管理社会につながるものと各界から批判された。

（4）井坂洋子は「伊藤さんの『姫』と私の『朝礼』と二冊が出来上がったのは六月一日。製本所美成社の前で、いっしょに仕上がりを待っていた。何部かその場で発送のための荷づくりをし、残りを池袋のばらうるに納めに行くところまでつきあった。わたしの分を手渡されたとき「今日は、枕もとに置いて寝てください」と以外に古風なことを言う。詩集とはそういうものなのか。荒川さんの顔を見ると、強気なくせにはにかみのつよいこの人はそっぽを向いている。」と記している。（二ノ

ン・ストップ」『荒川洋治詩集』「作品論・人物論」現代詩文庫75一九八一年十二月 思潮社

（よしだ たかし 広島大学大学院博士課程後期在学）